横芝の碑（その九十七）

荒神様と呼ぶ人もある——（本体に道標を刻んだ庚申様）

町原の庚申様を取材した時、地元の吉岡常二さんから、いろいろご指導を頂き、昔の道筋のご案内までして頂きました。その時、たまたま町原から姥山を通って桜前に抜ける道路のことに触れ「この道沿の周辺には庚申様を見かけない」とお話をしますと、「姥山か桜前か分らないが道路の畔に建っている筈である」と教えられました。

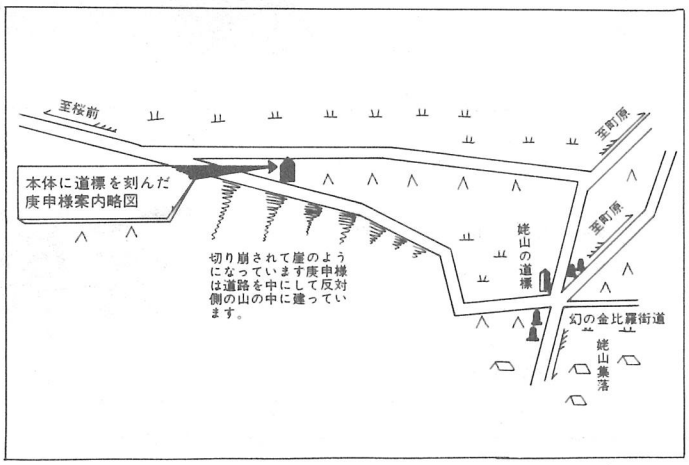
実は、〝幻の金比羅街道〟や〝三十三観音〟等を取材の折にも、地元の方々に庚申様についておたずねしたのですが「さあ、庚申様ねえ、分りませんね」という返事だけでした。其後、庚申様を一貫してご紹介することになったこともありましたので、更に姥山周辺を探して見ましたが、やはり見付かりませんでした。

吉岡さんのお話しを頼りに、早速庚申様探しに出かけました。本来ならば、姥山か桜前等の地区に入って地元の方々にお聞きするのが立前なのですが、既に何人かの方々にお聞きして「分らない」という返事を頂いておりますので、ひたすら道中沿を探して見ましたが、なかなか見付かりませんでした。或いは道が違っているのではないかと（恥かしい話ですが、町原から姥山までの道のりは比較的馴れているのですが、姥山から桜前までの道のりは二、三度しか通ったことがなかったのです）丁度道端の畑におられたお年寄りの方にたずねて見ますと「この道は一本道である、最近片方の山が崩されて砂を取って崖のようになって終ったので様子が変ったのだ」と教えてくれました。そして、庚申様のことを聞いて見ますと「庚申様？しんねえなあ、こうじん様ならすぐ其処の山ん中に建っているよ」という返事でした。「荒神様、どんな神様ですか」と聞き返しますと「さあ、わしらが生家の方ではへっついの神様だっていわれているがこの辺でも同じだっぺ」と答えてくれました。路傍の荒神様というのも珍らしいと思いましたので、お年寄りに教えられた場所を訪ねて見ますと、枯草に埋もれるように、石像というよりは土台石のような形に三ケ程の石が転がっていました。土取工事の傍杖でしょうか、無惨に破壊された石像だったのですが、これを積み重ねて見ますと、何と、これが吉岡さんに教えて頂いた庚申様だったのです。

庚申様は、天蓋なしの素朴なもので、正面上部に梵字を配し、青面金剛、寛政十二年（一八〇〇）申四月吉日と刻まれ、側面には、右しばやま、小いけ、左山〇〇〇、〇〇〇と刻まれています。〇〇の部分は磨滅していて判読が出来ません。建立者名は刻まれていません。吉岡さんのお話しの通り、この辺りは姥山と桜前の境になっているのですが、ここから桜前寄りに三又路があり、その二本は姥山方面に入っていますので、桜前の人々が建てたようにも思いますし、また、芝山、小池等を示しているところから見ますと、姥山の人々が建てたようにも思われます。更に、地元の方々の関心を呼んでいないことや、建立者名のないところ等を考え合わせますと、誰か奇篤な信者の方が建立したのかとも考えられます。

▲荒神様（庚申様）無残な割目を見せる

かまどの神とされている荒神様と信じている人のあるのは、金剛神或いは庚申の呼名が転化したものと思われますが、ともあれ、姥山、桜前地域にも庚申様は建っていたのです。それも、庚申様としては珍らしく本体に道標が刻まれているのです。既にご紹介してあります（その六十五）大正八年（一九一九）に建立された姥山及び桜前の二基の道標と、寛政十二年（一八〇〇）に建てられたこの庚申様に刻まれた道標を比較して見ると、又改めて昔の道筋が開明できるかも知れないのです。



○写真は、その庚申様で、破損された割目が無残にさえ見えます。

横芝町文化財審議会委員

小沢春光氏寄稿